

都市の近代化とドストエフスキー作品

学位論文内容の要旨

本論文は、序、第一章 都市をめぐる文学的主题、第二章 都市生活者の不安と文学作品、第三章 倫理規範の提示とメロドラマ、結論、文献目録から構成される（本文 148 頁：400 字詰原稿用紙換算約 460 枚）。

第一章では、ロシアの文学作品に見られる「ペテルブルグ」のイメージ、および人口増加に伴う都市生活の変化によって新たに出現した「群衆」や「遊歩者」のテーマについて考察している。

第1節では、文学作品におけるペテルブルグのイメージの変化を検討し、新首都の発展に呼応して、テーマが都市から都市生活、都市住人へと推移していったことを指摘している。

ペテルブルグのイメージには、18 世紀の建都以来たえず肯定的・否定的な相反する評価が交錯していた。この傾向は 19 世紀になるとますます多様化し、1840 年代の「生理学もの」の流行以降は、それまでの抽象的・理念的な性格づけを脱して、都市の住人に焦点を当て、都市生活の細部が詳しく描写されるようになった。論者はここで、ドストエフスキーの作品には都市の象徴的なイメージと生理学的なリアリティが共存することに注目している。

第2節では、都市の文学に新たに登場した「群衆」のイメージの変遷を検討している。

1820-40 年代のプーシキン、レールモントフの詩では、群衆（俗物）は個人（詩人）を際立たせるための対比として言及されていたが、40 年代のツルゲーネフやオガリョフの詩では、次第に勢いを増す群衆に対する驚きや感嘆が詠われるようになる。一方、60 年代のドストエフスキーの作品では、群衆の匿名性や集団性によって生み出される凶暴さといった新たな側面が描かれ、『罪と罰』には主人公の「人混みへの渴望」「群衆の中での救済」といったモチーフが現れる。論者はこれを、都市の急激な人口増加が進んだ時代の、個人と集団に関する新しい感性の表現と理解している。

第3節では、群衆の出現とともに生まれた「遊歩者」の形象の変化について考察している。

ドストエフスキーの作品には初期から後期まで、フランスの生理学ものやバルザックから取られた遊歩者の人物（夢想家）が登場する。ただし 40 年代の作品では、ポー『群衆の人』やディケンズ『骨董屋』と同じタイプの《群衆を観察する遊歩者＝語り手》が多く描かれているのに対して、後期作品では、それが群衆を観察することなく街をさまよい物思いにふける主人公へと形を変えている。論者はこれを、個人の孤立や疎外といった近代的な問題を提示するための、ドストエフスキーの新機軸と受け止めている。

第二章では、1860 年代以降の社会状況を概観し、都市の近代化とともに発生した社会問題が、同時代の文学作品でどのように取り上げられているかを検討している。

第1節では、農奴解放後の資本主義化によって都市に労働者が流入した結果、貧富の差の拡大や、犯罪、伝染病、飲酒、売春の増加、社会道德の低下が問題となり、文学作品でもしばしば取り上げられるようになったことが述べられている。

ペテルブルグでは、中心街を取り囲む商工地帯のさらに外側の周縁部分に労働者の居住区が形成され、そこが伝染病や犯罪の温床となっていた。B.B.クレストフスキー『ペテルブル

グの場末』、B.ミフネヴィチ『ペテルブルグの潰瘍』など同時代の大衆文学やルポルタージュ文学と並んで、ドストエフスキーの『罪と罰』などの後期長編小説でも、しばしば労働者の居住する場末を舞台として、都市の劣悪な労働・生活環境やさまざまな犯罪、倫理規範の低下の様相が描かれている。論者はこれを、時代に共通した文学的関心のありかを指し示すものと性格づけている。

第2節では、『白痴』、『悪霊』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』などドストエフスキーの後期作品における、倫理規範の低下、思想の歪曲や社会の無秩序などのテーマについて検討し、作家が倫理規範の低下の原因を、貧困だけではなく、拝金主義や行き過ぎた権利の主張、詭弁などの思想の歪曲に求め、上・中流階級の若者たちを含めた社会の全般的無秩序に目を向けている点が特徴的であると述べている。

第3節では、『ペテルブルグの場末』と『罪と罰』を比較して、前者に見られる《飢えた者＝善良な者、正直者》《満たされた者＝悪人、恥知らず》という単純な善・悪の二項対立と同じ構図が、『罪と罰』の錯綜した構成の背後にもあり、両作品には単純明快な道德規範を強調する、メロドラマの手法が共通して用いられていることを指摘している。

第三章では、メロドラマ的手法が、都市の犯罪と悪徳を描き、倫理規範を提示するのに適した表現方法であることに着目し、(1)メロドラマの変遷、(2)ドストエフスキーとメロドラマ、(3)メロドラマ的表現、(4)メロドラマ的表現の複雑化という4つの視点から、ドストエフスキーのメロドラマ観と、その作品に見られるメロドラマ的手法を分析している。

第1節では、メロドラマの、西欧における発展と、ロシアでの受容について概観し、ロシアでは、1830-40年代にメロドラマ演劇が盛んに上演されたのに対して、メロドラマ的小説が書かれるようになったのは60年代以降のことであり、その背景には、農奴解放後の資本主義化による社会状況の急激な変化があったことを指摘している。

第2節では、ドストエフスキーとメロドラマ演劇、およびメロドラマ的小説とのかかわりについて考察している。

ドストエフスキーは、メロドラマ演劇に見られるブルジョア的・偽善的な価値観には批判的だったが、青年時代にはメロドラマ的小説を愛読していた。特に『虐げられた人々』にシューやディケンズの影響が顕著なことはしばしば指摘されるが、その後の長編小説にもバルザック、ディケンズ、シュー、ユゴーらの作品と共通するメロドラマ的な手法が繰り返し用いられていることが確認されている。

第3節では、『虐げられた人々』以降の長編小説に注目し、ドストエフスキーの作品では、メロドラマ的な誇張された外面描写や、登場人物のセリフにしばしば現れる「高潔な」「正直な」「卑劣漢」といった対極的な道德的自他認識が、隠された倫理的問題を顕在化させ、登場人物たちの衝突を引き起こす働きをしていることに注目している。

第4節では、ドストエフスキーがメロドラマの形式を換骨奪胎して、登場人物の内的葛藤や、倫理規範と信仰の問題を描くために用いていることについて考察している。

ドストエフスキーの作品にもメロドラマ的な単純化された善悪の対比が見られるが、ここでは単に善と悪、美德と背徳を体現する人物を対照的に配置するだけではなく、たとえば『罪と罰』におけるラスコーリニコフに対するソーニャとスヴィドリイガイロフの関係のように、主人公自身の内面にひそむ善悪の葛藤を外面化した登場人物を配置することによって、メロドラマの形式がより複雑化されていることが指摘されている。

また、倫理規範と信仰の深い結びつきもメロドラマと共通の要素といえるが、ドストエフスキーの作品では、倫理規範や神の存在そのものに疑問を投げかける主人公が描かれ、メロドラマの手法を用いながらも、新たなテーマが提示されていると述べられている。

以上、本論文では、ドストエフスキーが都市の近代化から汲み取った社会問題、文学的主題とそれを表現するのに用いた創作手法を、同時代の文学作品との関連の中で考察している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 安 藤 厚
副 査 准教授 大 西 郁 夫
副 査 教 授 望 月 哲 男

学 位 論 文 題 名

都市の近代化とドストエフスキー作品

審査の方法および経過

平成21年12月18日	審査委員会発足	
12月22日	第1回審査委員会	論文の配布と審査日程の調整
平成22年1月6日	第2回審査委員会	論文内容の検討と問題点の整理
1月21日	口頭試問の実施	
同	第3回審査委員会	口頭試問の内容検討と評価、学位授与の判定
1月25日	第4回審査委員会	審査結果報告書(案)の検討と確認
1月28日	第5回審査委員会	審査結果報告書の確定

5回にわたる審査委員会の審議と口頭試問を通じて、以下を確認した。

1) 本論文の観点と方法

本論文は、ドストエフスキーの文学の主要な特徴を明らかにすることを目的とし、19世紀後半のロシアにおける都市の急激な工業化・近代化に伴う、人口の増加や生活環境の変化によって生じた、犯罪の増加、倫理規範の低下などの社会問題が作品でどのように描かれているかを考察の中心に据えている。

方法としては、文学的比較・対照の手法により、当時の社会状況や国内外の文壇の潮流を参照してその作品をとらえ直し、(1)作者が都市から汲み取ったテーマ、(2)社会の現状に対する問題意識、(3)新しいテーマを描くために採用した新たな創作手法などを分析している。

2) 本論文の内容(「学位論文内容の要旨」を参照)

3) 当該研究領域における本論文の研究成果

論者は、都市の近代化をドストエフスキーがどのように描いたかを明らかにするために、作品のテーマや手法を西欧およびロシアの文学と対比して、(1)都市の文学、(2)社会問題と倫理規範、(3)メロドラマ的手法という3つの視点から分析した。

その結果、ドストエフスキーが都市の急速な近代化に対して同時代のロシア作家と共通の問題意識をもち、バルザックやディケンズら西欧の作家とも共通する手法を用いていることを確認するとともに、ドストエフスキーが先行の文学作品にも見られる「群衆」や「遊歩者」のイメージに新たな側面を見だし、またメロドラマ的手法を換骨奪胎してさらに複雑化するなど、新たなテーマと手法を提示したことを解明することができた。

過密化、大衆化の過程でさまざまな問題を抱え込んだ近代都市社会に対する、ドストエフ

スキーの文学的対応の特徴を分析しようとした本論文の作業は、特に第一章と第二章前半では説得力のある成果に結びついている。

とりわけ『罪と罰』の主人公における「人混みへの渴望」「群衆の中での救済」のモチーフや、後期作品における、群衆を観察することなく街をさまよい、物思いにふける主人公の姿の分析、さらに同時代の「場末の文学」と『罪と罰』を対比した考察などは、本論文の新しい成果として評価できる。

第三章において、メロドラマ的手法の西欧における展開と、ロシアでの受容の過程を整理し直し、さらにドストエフスキーがこれを利用したときの新たな工夫について、「メロドラマ的表現の複雑化」などの斬新な見方を提示したことも評価できる。

以上を踏まえて、口頭試問では「メロドラマ的手法」のとらえ方を中心に議論が交わされ、本論文の考察に加えて、さらに多面的な考察の必要な点として、メロドラマ以外の多様な文学伝統や、トルストイ、ツルゲーネフら同時代の大作家の作品との対比、メロドラマの形式における「倫理規範」以外のさまざまな要素への目配りなど、いくつかの点が浮かび上がった。

ただし、それらはむしろ今後のこの分野の研究の発展性を約束する要素として受け止められるべきであり、本論文の学問的な価値を否定するものではないと判断される。

総じて、本論文では、ドストエフスキーの複雑で多面的な文学世界を、大衆文学の単純明快なテーマや手法と対比することによって、そこに新たな光を投げかけることができたと評価できる。

4) 学位授与に関する委員会の所見

以上、申請論文の慎重な審査と口頭試問の結果に基づき、本審査委員会は全員一致して、河原法子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。